

自閉的小児の遊戯療法に関する事例研究

児童研究所児童相談室

力富敬子・水野時枝

A Case Study on a Playtherapy for an Austistic Child

By

Keiko RIKITOMI and Tokie MIZUNO

近年、小児自閉症について、いろいろの相談機関からその数の増加が指摘されるとともに、ジャーナリズムにもその実態、教育などについてとりあげられることが多くなってきた。児童相談室でも、開設当所の47年6月から、小児自閉症の疑いがあるということで来所した子どもの遊戯治療を継続してきた。その事例についてここでまとめたものである。

<事例>

田中 一夫（仮名）

昭和41年4月25日生 男子

1. 家 族

父：43才 旧制中学卒 新聞社勤務

母：37才 高卒 主婦

姉：10才 小学生

父親は、神経質で気が弱く、人づきあいが悪い方である。机の上などきちんとしていなければ気がすまないが、家庭内のことに関して極度に無関心である。対人関係においても、たとえば、親せきの人に来てても無関心で新聞を読んでいるというように、少し変わった人であるという評価を受けている。そのような性格と仕事の都合もあって、本児の相手になってやるということはほとんどない。

母親は、話し方、動作など普通の母親という感じであるが、防衛的態度をかなり強くもっている。本児の通園している幼稚園の先生や他の園児の母親に対してさけるような固い態度をとりがちであることから、「子どもが他の子に迷惑をかけているのに……」という反発をまねている。

養育態度は、本児に対してしつけなど厳しくしたことはなく、たとえば食事などのんびりと食べるにまかせていた、と述べているが、観察によれば、「そんなきたない手で食べてはダメ！」というようにピシヤリときめつけるような言い方をしているようである。

本児の姉は、非常に活発でおしゃべりな子どもであり、友達も多く先頭に立って遊ぶほうである。家庭内でもにぎやかにふるまい、本児がしゃべろうとすると横からとってしまうという

ところがある。

2. 生育歴

妊娠時、出生時ともに問題はなく、その後も目立った病気はしていない。歩行開始は、満1才すこし前、発語も早いほうだった。2才のときは、カルタとりの仲間入りができ、ブランコもこげた。このように2才までは順調に生育してきたと思われる。

3才のとき家を引越し、その頃から、母親の言い方によれば「動きがとまった」という状態があらわれはじめた。外に遊びに出るのを嫌い、ブランコも恐がってこがなくなり、家の中でポケーとして、テレビの前でじゅうたんの毛をむしっているという状態も時々みられた。それを母親は、ひとりで居れる子で扱い易いということで気にとめなかった。

4才で幼稚園に入る。その年の八月に集団生活ができないということで幼稚園の先生にいわれて名古屋市児童福祉センターに行った。そこで脳波検査を受けたが異常はなく、発達の面で軽い遅れがあり、精神科の医師の診断では「小児自閉症の疑い」とされた。その時の本児について、表情がほとんどない、ヒステリックな奇声を発する、自分勝手に行動する等の記録がある。福祉センターでは、本児は自閉症児のグループセラピーに加えられたが、時々しか出席しなかった。そのとき精神科の医師の指示で薬を1ヶ月間ぐらい服用していたが、母親の判断でやめてしまった。

5才になって、通園していた幼稚園をやめて、近くの新設の幼稚園に入った。

3. 来所当時の状況

幼稚園での集団生活に適應できず、みんながすわっているときも、ぶらぶら歩きまわる。みんなが静かにしているとき奇声を発する。あるいはひとりでニタニタ空笑いをする。ひとりしゃべりをするが対話にならない、といった行動上の問題があった。また絵をかく、ハサミを使う、歌ったり楽器を使うといった保育内容については、ほとんどできない。幼稚園に出かけることについては、朝多少ぐずぐずするが出かけてしまえばよかった。

家庭でも、対話はほとんどできないが、基本的な生活習慣はいちおうできていた。母親から何か云われると、ぐにゃぐにゃ、イライラした感じで、「やれない、やれない」とすねて泣いた。食物ははじめてのものは絶対食べようとせず、おもちゃ、服など新しいものを欲しがらなかった。

4. 遊戯治療の経過

遊戯治療は、本児とセラピストとの一対一で行われ、原則として週一回、一回は一時間である。遊戯治療と並行して母親のカウンセリングが行われた。開始より現在まで約6ヶ月になるが、初めの三ヶ月間を第Ⅰ期、変化があらわれはじめたその次の三ヶ月間を第Ⅱ期とし、以下各々の時期の特徴を述べる。

<第Ⅰ期> 第1回—第10回

最初プレイルームに入ったとき、おもちゃにも関心を示さず、話しかけても応答をしない。表情はほとんどなく、なんとなくぶらぶらしているだけで特別な行動はみられない。

この時期の遊びは、砂場で砂をいじっている。三輪車をのりまわす。水いじりといった限ら

れた、しかもレベルの低い遊び方をしている。ことばは、「これ何?」「どこで買ったの?」という同じ質問が毎行われる。時々「かずくんは(自分のこと)……」とひとり言のように話し出す、文章になっておらず、内容はわからない。断片的なことばをとらえて母親にあとできくと、どうやら以前の出来事について話しているらしい。セラピストとの間には、「これ何?」「ラッパよ」という簡単なやりとりはなされるが、セラピスト側からの質問には答えないで知らん顔をしている。表情はあまりなく、何となく遊んでいるという感じである。

<第Ⅱ期> 第11回—第21回

第11回るとき、大きな声で「こんにちわー」と云って入ってきてセラピストを驚かせる。このときくらいからプレイルームでの行動に変化が目立ってきた。三輪車のホーンを鳴らしながら自分もそれに合わせて「ピポピポ」と大きな声で云いながらぐるぐるまわるというように遊びに活気がでてくるとともに、顔つきが明るくなり、よくおしゃべりをするようになってきた。セラピストの質問にも時々ではあるが答えるようになった。話し方はたいてい、「きのうねー、かずくんねー……」というように話しかけているようでもあり、ひとり言のようでもある。昨日、今日、明日の使い方がでたらめであること、文章になっていないことから内容はつかめないが、11月に入ってから、海に行ったことなど話したりする。遊び方には、本児の工夫の加わったものが多くあらわれるようになった。

またセラピストの顔をよく見るようになり目がよく合うようになった。しかし時々、じっと砂場の砂を見つめている、というように、もの思いに沈んでいるという感じの状態がみられる。

<幼稚園での行動> プレイセラピーの第Ⅱ期に入る頃と時期を同じくして、幼稚園での行動が見ちがえるようになってきたということを幼稚園の先生が報告している。とにかくみんなと一緒に行動でき、みんなと一緒に居れるようになったこと、他の園児や先生との間に関係が持てるようになり、話しかけに応じたり、自分から話しかけたりするといったことがみられるようになった。ただ保育内容にはみんなについていくのは困難である。それと性器いじり、おしっこをもらすという行動があらわれている。

<母親の態度> 最初は、まわりから言われて仕方なく来所したという固い態度がみられたが、面接の回を重ねるにしたがい、あるいは子どものよい方向への変化がみられたこともあって、好意的になり、本児に変わったことがあるとすすんで報告がなされるようになった。しかし母親自身の感情が素直に語られるということがない。養育態度について、ほめてやれば子どもが自信をもつようになってよい、という発言が出てくる。本児について、しょうのない子だね、という諦めの気持と絵の一つもかけたらよいのにと期待を持っている。

5. 考 察

以上述べてきたように、この事例では、人との疎通性に欠ける。言語遅滞がみられる、生育歴上3才くらいから問題が出てきている、そういった点から小児自閉症を疑われてきた。これらは小児自閉症の基本的特徴とされている。その他、副次的特徴とされ、自閉症児によく見られる固執性も、本児においてみられるが、特別なものへの興味の集中はみられない。これらの特徴を本児は比較的軽い程度にもっていること、心理療法によってかなり効果をあげてきたこ

と、及び自閉的傾向があらわれてきた年齢からみて、いわゆるアスペルガー型の自閉症児ではないかと思われるわけである。しかし本児の場合、特殊なものへのタレントはなくむしろ発達の全体的な軽度の遅滞が目につく。もし自閉性のため発達遅滞が生じているのならば、心理療法が進むにつれて、何らかの知的興味が出てくるかもしれないし、本児の問題が発達遅滞によるところが大きいならば、心理療法や環境調整によって、自閉性がなくなってくるとも考えられる。この事例の場合、ここで結論を下すことなく、さらに本児がどのような変化をするか見ていく必要があるだろう。